



特集センター開設10年

資料室の活動と所蔵資料

人と防災未来センターは2012年4月に開設10周年を迎えました。所蔵震災資料は、資料収集活動によって年々増え、17万8千点以上になりました。また、防災・減災への関心の高まりから、震災資料の活用の幅が徐々に広がり、企画展の開催や資料貸出の件数なども増えてきました。今号では、開設からの資料室の活動を振り返ります。

資料の収集・保存活動

当センターの所蔵資料のほとんどは、センター開設前の収集事業によって集められたものです。兵庫県の大規模収集事業などにより約16万点の震災資料が集まり、センター開設時に資料室に引き継がれました(資料収集事業については、資料室ニュースVol.45で詳しくご紹介しています)。しかしその後も、被災された方のお申し出や、震災資料専門員の資料所在調査により、開設後10年間で1万8千点以上もの震災資料が収集されています。これらの震災資料は、保管環境を整えた収蔵庫で保存しており、資料専門員が日々、温湿度の管理などを行っています。



温湿度計測器を確認する
震災資料専門員

資料の活用促進

収集された震災資料は、阪神・淡路大震災を伝えるため、今後の防災対策に役立てていただくために活用を進めています。震災資料専門員自身が資料を活用した企画展示を立案したり、資料集を編集・発行することもあります。また、行政や出版社が防災啓発を目的とした出版物を発行する際に、当センターの写真資料を貸し出すこともあります。他の博物館などで行われる特別展示に、実物資料を貸し出すこともあります。特に写真資料は、年々多くの利用者から貸出申請をいただくようになりました。小中学校の授業で震災を伝えるためにご利用いただいたり、自主防災会の活動にご利用いただいたり、幅広い年代の方々にご活用いただいています。

2011年の東日本大震災後には、被災地にボランティアに行かれる若い男性が、「復興後の神戸の写真を東北の方にお見せして、希望を持っていただきたい」とおっしゃって、写真を借りて行かれたこともありました。利用者のご要望をお聞きして、さまざまな写真資料の中から写真を選ぶお手伝いもしています。



震災資料作品展 想いを伝える
(2004年度企画展)



戦後神戸の歩みと阪神・淡路大震災
(2010年度企画展)



つなみってどんなもの?
夏休み防災みらい学校2006

ぼうさい・げんさいゲームで遊ぼう!
夏休み防災未来学校2012



震災・防災に関する情報発信

資料室では、阪神・淡路大震災に関する質問、今後起こりうる東南海・南海地震に関する質問、活断層に関する質問など、震災や防災に関する質問や相談を受け付けてきました。研究のために資料を探している大学生、自由研究をまとめている小学生などから電話をいただき、資料室で所蔵している関連図書などをお知らせしています。センター開設以来、1,900件以上の相談をいただきました。

また、夏休みの子ども向け企画「夏休み防災未来学校」では、資料室所蔵の紙芝居や防災ゲームを用いて、防災の大切さをわかりやすく伝える企画を開催してきました。これからも、資料を活用し、情報を発信していく活動を続けていきます。

『災害ミュージアム研究塾2012を開講します!』

2012年10月20日(土)から2013年3月まで毎月1回、災害ミュージアム研究塾2012を開講します。災害ミュージアムとは、国内外の災害・防災の資料収集や展示に取り組み、被災経験の継承や防災の意識の啓発に取り組んでいるミュージアムのことです。人と防災未来センターでは、設立以来10年にわたり、災害ミュージアムとのネットワークづくりを通し、災害の資料活用や展示のあり方を探ってきました。そこで、災害ミュージアム研究塾2012では、日本全国にある災害ミュージアムの方を講師にお招きし、各地域の災害の概要や資料展示の特徴・工夫について学ぶとともに、参加者間で展示を通じた被災経験の伝え方・防災意識啓発のあり方を考えることを目的に開催します。詳細・お申し込み等については、別途資料室ニュースをお届けしている皆様へ送付しているチラシに記載しています。資料寄贈者の方や、災害資料に興味がある方のご参加をお待ちしています。



焼け跡(神戸市長田区)
兵庫県企画管理部知事室広報課寄贈写真



溶けた硬貨(缶入) 大貫計一氏寄贈

● 災害ミュージアム研究塾の各回の内容

第1回	10月20日(土) 14:00~16:00	『阪神・淡路大震災 震災資料の17年』 講師 高野尚子(人と防災未来センター震災資料専門員) 阪神・淡路大震災(1995年)から17年、そして、人と防災未来センターの設立から10年を迎えました。センター資料室では、震災資料専門員が震災資料の収集・整理・保存・活用を行ってきました。この10年間の節目を機に、活動の成果を振り返り報告するとともに、現代に起きた災害の記憶・資料を保存収集することの意義と、しかしながらそこに生じ、これから解決しなければならない様々な課題についても提議しながら、これからの10年、そしてさらに未来へと、阪神・淡路の経験を語り継いでいく上で大切なことを、みなさんと一緒に考えたいと思います。
第2回	11月18日(日) 14:00~16:00	『被災経験継承のために —複数の展示拠点とネットワークづくり—』 講師 長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」研究員 山崎麻里子氏 新潟県中越地震(2004年)のメモリアル拠点として点在する4施設・3公園を指す名称『中越メモリアル回廊』。これらの拠点をめぐることによって災害の全体像を把握するという、地域全体を災害ミュージアム化させた事例です。その一施設から研究員をお迎えし、ひとつの施設に展示を集約して見せる、人と防災未来センターとは異なる記憶継承の試みを紹介していただき、ミュージアム施設の場所と、地域との関係について考えます。
第3回	12月16日(日) 14:00~16:00	『東日本大震災の文化財レスキューと展示活動』 講師 遠野文化センター調査研究課主査兼学芸員 前川さおり氏 震災からよみがえった東北の文化財展実行委員 若月憲夫氏 東日本大震災では、複数の博物館・図書館などが被害を受け、収蔵されていた多数の文化財も被害を受けました。そのようななか、被災した文化財を一刻も早く救出するためのレスキュー活動が行われました。また、その成果と重要性を伝えるための企画展もいち早く開催されました。文化財レスキュー活動に携わり、この展示を企画・運営したお二人をお招きし、その経験と展示に込められた想いについてお話しいたします。また、講演終了後に、講師による「震災からよみがえった東北の文化財展」(*12/11~1/27人と防災未来センター東館にて実施予定)の展示解説を行います。
第4回	1月	『地域を拠点とした被災経験の継承 —阪神・淡路大震災と東日本大震災—』 講師 神戸市立地域人材支援センター、大槌震災復興館、野田北部・たかとり震災資料室
第5回	2月	『長田区役所職員による阪神・淡路大震災の記憶継承の取り組み』 講師 人・街・ながた震災資料室
第6回	3月	『地域の歴史・自然そして災害の記憶を語り継ぐ —雲仙岳記念館・ジオパークの挑戦—』 講師 雲仙岳災害記念館・島原半島ジオパーク

※ 日時や講師は変更する場合がございます。詳しくはチラシや人と防災未来センターホームページをご参照ください。



ワークシートも試行錯誤!?

資料室では、7人のスタッフがカウンター席とは別に、日々議論を繰り広げています。ワークシートをどうすればもっとよくできるのか、という話もその一つです。宿題がやり直しになるのと同じように、「小・中学生には難しすぎる」「関係のある本が資料室にない」といった理由から、みなさまの目に触れることなく消えていった試作品が数多くあります。

今回はみなさまが普通、目にすることのない、ワークシートの試作品をお見せします。

問

日本は古くから津波に襲われてきました。
下の1~5から正しいものをすべて○で囲みましょう。

試作品番号001

- 1 北海道東部は、ロシア船の日誌から、数百年に1度、大津波に襲われていたことが分かっている。
- 2 近畿地方には津波による被害を記した約3000年前の文字資料もある。
- 3 瀬戸内海にはプレートの境界線がないため、津波の到達をうかがわせる記録はない。
- 4 沖縄県にも、過去、集落に壊滅的被害を与えるような巨大津波が押し寄せた形跡がある。
- 5 日本以外でも、200年以上前に起きた津波の様子が記録されている国が存在する。

解答・解説 正しいのは、4、5。

- 1 北海道東部も津波堆積物などから過去に何度か大津波に襲われていたとされています。津波堆積物は古い時代の津波を知る手がかりで、ボーリング調査や遺跡の発掘調査で見つけることがあります。
- 2 近畿地方は文字資料の宝庫ですが、できごとが文字に記録されるようになるのはもっとあとのことです。津波に関しては、『日本書紀』にある684年のもの(白鳳南海地震)が最も古い記載とされています。
- 3 瀬戸内海でも過去に津波が到達したという記録があります。遠方から津波が伝わってくる場合や、海底の地震に伴って津波が起きる場合もありますから、注意が必要です。
- 4 沖縄県でも巨大津波の痕跡とされるものが見つかっています。1771年の八重山地震津波では石垣島などで壊滅的な被害が出たとされているほか、1960年のチリ地震津波でも県内で津波による被害がありました。
- 5 例えば、1755年には大西洋でマグニチュード8クラスの巨大地震が発生し、ポルトガルなどで津波による大きな被害が出たと記録されています。

問

右は秋、西日本の盆地で、通勤途中に撮った写真です。
霧で信号がぼやけ、視界が悪くなっています。霧は交通事故の原因になることもあり、危険です。秋の内陸部で比較的好くみられる朝霧はどのような場合に発生するでしょうか。
下の1~5のうち最も適当なものを○で囲みましょう。

試作品番号002

- 1 前日の夜から当日の朝までずっと曇だった場合。
- 2 前日の夜から当日の未明に晴れて気温が下がった場合。
- 3 前日の夜から当日の未明に気温が大きく上昇した場合。
- 4 前日の最高気温が20℃以上だった場合。
- 5 前日の最高気温が15℃以下だった場合



2011年10月10日午前7時20分ごろ撮影

解答・解説 最も適当なのは、2。

霧は雲が地上にある状態といえ、細かな水滴からなります。霧の発生原因の一つとして、川や池、海、湿った地面・樹木の周辺などにある水蒸気を多く含む湿った空気が何らかの形で冷やされることが挙げられます。ただし、霧の発生要因・地域は多様です。例えば、晩春から夏ごろには本州東方から千島列島周辺が、春の雨天時には瀬戸内海が霧に覆われることがあります。霧は風や地形の影響も大きく受けるため、予測が難しい現象の代表格です。

(震災資料専門員 谷岡能史)

新着資料紹介

地震の衝撃で壊れた天井扇

神戸市東灘区在住の谷口健太さんより、震災で壊れた天井扇をご寄贈いただきました。

天井扇は鉄製で昭和3年製。震災当時は寝室の天井からぶら下がっておりその下にはベッドがありました。

地震当日、激しい揺れで、谷口さんの頭の上の天井扇はブンブン揺れ、羽の1つが天井に突き刺さりました。他の羽は天井を突き破りつつ、折れて破片となって床に落ちましたが、幸いにも下で寝ていた谷口さんにケガはありませんでした。

地震の破壊力を伝える壊れた天井扇は、その後もぶら下がったままになっていましたが、この夏に取り外すことになり、資料室にご寄贈いただくことになりました。

谷口さんからは、ご自宅の被害状況だけでなく、当時のご近所の状況や被災された方々の様子もお聞きすることができました。

給水車が水を配りに来たときには、近所の人たちが自然に知らせ合ったそうで、普段からの近所づきあいが、自然と災害時の助け合いにつながっていたそうです。谷口さんは、普段からの近所づきあいの大切さを実感したそうです。

また当日、固定電話がつながらなくなっていたために、阪神住吉駅前では公衆電話の前に行列ができていたそうです。「列の前の人が次の人のために10円を置いておいてくれたり、10円がない人がいたら分けてあげたりという助け合いが生まれていた」と話しておられました。



谷口さん宅の天井扇。羽の1つが天井と室内灯の間に挟まっている。



羽の破片とともに人と防災未来センターの収蔵庫に到着。

新着図書紹介

「阪神・淡路大震災 震災障害者・震災遺児実態調査報告書」



※報告書は兵庫県復興支援課のホームページからも閲覧できます。

阪神・淡路大震災に起因する障害者(震災障害者)や遺児(震災遺児)については、その実態が十分把握されていなかったため、復興フォローアップ委員会からの提言も踏まえ、平成22年8月に兵庫県と神戸市が「県・市合同調査チーム」を立ち上げ、震災障害者・震災遺児実態調査を開始しました。

報告書の構成は、「平成23年度アンケート調査結果とその分析」および「平成24年度面接調査のインタビュー内容」となっています。インタビューでは、「地震直後や救出時の状況」、「病院への搬送・治療やリハビリテーションの状況」、「震災前後の生活や気持ちの変化」、「震災障害者や震災遺児に必要なこと」など震災障害者・震災遺児の「生の声」を知ることができます。

阪神・淡路大震災に関する貴重な資料として、関心のある方々に広くご活用いただければと考えています。

「震災障害者・震災遺児実態調査報告書」

https://web.pref.hyogo.lg.jp/wd34/wd34_000000177.html

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター 資料室(西館5階)

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

TEL.078-262-5058 FAX.078-262-5062

HPアドレス <http://www.dri.ne.jp>

開室時間 9:30~17:30(展示スペースとは時間が異なりますので、ご注意ください)

閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日) 12月29日~1月3日

資料室は無料で
ご利用いただけます